

[武蔵国分(僧)寺跡(府中市)]探訪レポート

天平13年(741)の国分寺・尼寺創建の詔に基づき鎮護国家を祈念して設置された国分寺の一つで、近年の発掘調査の結果、寺域は東西8町・南北5町でその中央北寄りに僧寺、南西隅に尼寺が配置していることが確認された。僧寺は、東西165メートル、南北139メートルを一本柱塀で区画した中に金堂・講堂・東西両僧坊・鐘楼・経蔵が所在し、また区画外に塔を配置している。尼寺は、金堂・尼坊・一本柱塀等が確認されている。なお、僧寺と尼寺の間に幅12メートルの推定東山道が確認されている。



(インターネットより引用)

武蔵国分寺(僧寺)の発掘調査現場



中門跡から金堂跡、講堂跡方向を見る



中門跡を示す



金堂跡



金堂跡



金堂跡の史跡指定碑



金堂跡その後方が講堂跡



金堂跡その後方が講堂跡



講堂跡



鐘楼跡





国指定
史跡

武蔵国分寺跡

国分寺市では、歴史公園の整備をすすめています。

整備イメージ図

史跡武蔵国分寺跡(僧寺地区)新整備基本計画を元に作成



※部分は管理・活用施設

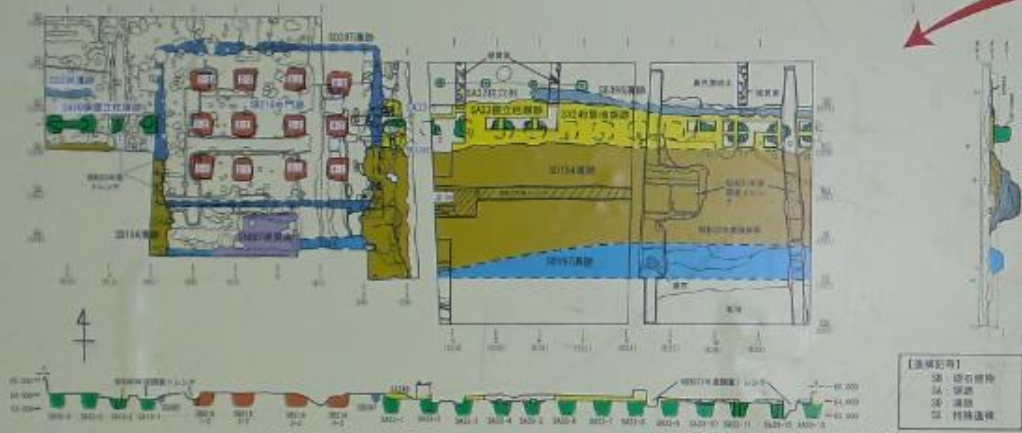
奈良時代中頃、聖武天皇は仏の力で国を安定させるために、諸国に国分寺の建立を命じました。武蔵国では、都と国府(現府中市内)を結ぶ古代官道「東山道武蔵路」沿いの東に僧寺、西に尼寺が計画的に配置されました。武蔵国分寺跡は、全国の国分寺跡と比べても規模が大きく、その歴史的重要性は認められており、大正11年に国指定史跡に指定されています。

国分寺市では、郷土の歴史を語り継ぐよりどころであるとともに、豊かな自然を残す場として市民に広く親しまれてきた武蔵国分寺跡を歴史公園として整備・活用するための事業を進めています。既に市立歴史公園「武蔵国分尼寺跡」(平成15年開園)として整備された尼寺地区に引き続き、平成15年度より僧寺地区の保存整備事業に着手しています。

平成20年4月 国分寺市教育委員会

復原の手がかりを求めて ～中門周辺の調査～

金堂・講堂と、羅漢・経蔵、東西僧坊のある一画を中枢部と呼んでいます。中門は中枢部の南面中央に開かれた特別な門で、中枢部を区画する堀や溝がその左右に取り付きます。中門と堀は整備によって実物大に復原する予定であり、そのデータを得るための調査を平成15年度から19年度にかけて行いました。ここにその概要をご報告します。



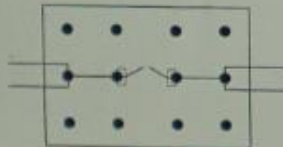
中門周辺 調査全体図



武蔵国分寺中門イメージCG

中門の規模と構造

- 正面の柱間は三間（約9.6m）、中央の間が広く戸口になります。奥行きは二間（約6m）で、中心の柱の前後に、四本ずつ8本の柱があり、八脚門と言います。
- 発掘調査では、建物の基礎は確認されず、柱を支える礎石の下のみを地盤改良した地下の基礎工の跡が確認されました。この基礎工は、地表面に一辺約1.5m方形で、深さ1m以上の桶型の穴（礎石鑿方）を掘って、土と石や瓦を入れて版築してつき固め、上部に根石とより大きめの石を置いて柱をのせる礎石を安定させました。柱がある礎石は全て失われていました。
- 礎石鑿方の下層には、瓦を敷いた層が2層確認されました。完全な形の瓦で屋根に替く前の未使用品が用いられたと考えられます。瓦は厚河部を示す「中」の印が押捺された文字瓦など、創建期のものです。これによりこの中門は、創建期に建てられたと考えられます。



中門平面様式図



礎石鑿方に刺かれた瓦

中枢部区画施設について

- 中枢部を区画する堀については、独立柱式の堀であったものから、葦藁土を積上げた築地堀へと造り替えられたことが平成17年度の調査によって判明しています。
- 今回の調査では、中門の西側に取り付く堀の柱位置が確定し、直径約30～36cmの柱が使用されていたことが分かりました。
- 中枢部区画堀の外側には、大小2条の溝が巡っています。大溝は中門前面で途切れ、小溝は中門前面も掘られていますが、上層に参道と関連する礎石部が確認されました。

古代武蔵国分寺の全体像や埋もれている建物遺構などの規模や構造を明らかにするために、今後も確認調査を続けていきます。

七重塔跡









『この不思議な土台は、地元の方々がここに国分寺跡の碑を立てるつもりで作ったものなのですが、国指定史跡ということで自由に碑などを作ることが許されないことがあとで分かり、やむなく中断したもの。』

七重塔跡

国指定史跡武蔵国分寺跡

指定年月日 大正十一年十月十二日

国分寺造営の詔に、「造塔の寺は国の華
たり」と象徴的に記されている塔は、「金
字金光明最勝王経」を安置する国分寺の
重要な施設でした。

この塔は「続日本後紀」によって承和
二年（八三五）に雷火で焼失し、十年後
に男衾郡（埼玉県比企郡）の前大領（郡
の長官）の壬生吉志福正がその再建を願
いでて許可されたことが知られています。

昭和三九年の発掘調査の結果、塔基壇
が修復されていることや礎石の下に瓦片
を大量に詰め込んでいることなどが明ら
かになり、このことが証明されました。

塔の再建にあたっては北方建物の新築・
講堂の増築・寺地内付属諸院の整備など
も併せて行ったようであり、創建以来の本格
的な造営事業に発展したと推察されます。

平成六年一月

国分寺市教育委員会



文化財愛護
シンボルマーク



武蔵国分寺伽藍復元模型設計書より転写
(ふるさとふれあい振興事業)



武蔵国分寺七重塔復元模型設計書より転写
(ふるさとふれあい振興事業)

武蔵国分寺(僧寺)跡から楼門、現国分寺(万葉植物園)方向へ進む





楼門



「江戸時代の建築様式をよくとどめている」とある



禅宗様の花頭窓、棧唐戸が付いている

柱の上下部を僅かに削った粽、礎石と柱の間に石製の礎盤が入った禅宗様になっている



垂木は平行垂木であった

市指定重宝 国分寺楼門

昭和五十一年十月七日 指定

建物は間口三間（約6.2メートル）奥行二間（約3.7メートル）の楼門造り、板金葺で、江戸時代の建築様式をよくとどめています。

この門は、米津出羽守田盛（通称内蔵助）の元菩提寺として建立された米津寺（東久留米市）の楼門を明治二十八年に移築したものです。国分寺境内の諸建築物とともに、国分寺の変遷を知るうえで重要な建物です。

※米津出羽守

出身地は、三河国碧海郡米津村で出羽守田盛の時に久留米村前沢を知行地とする。石高は、一万五千石 大坂定番を勤める。

国分寺市教育委員会

文化財を大切にしましょう



文化財愛護
シンボルマーク

大仏様の挿肘木が使われている



禅宗様の特徴である台輪が廻っている



中備は珍しい卍形を彫り込んだ板蛙股



柱上の組物は出組

現国分寺(万葉植物園)



薬師堂へ向かう仁王門



仁王門



市指定重宝

国分寺仁王門

指定年月日

昭和三十九年一月十五日

この門は、宝暦年間（一七五一～一七六三）に建立された入母屋造の八脚門で、間口が九・〇メートル、奥行が三・六メートルあります。

使用されている建築材は、『新編武蔵風土記稿』の仁王門の条に、「此の門近世までの薬師堂なりしを再興の時きりちぢめて仁王門になせり」とあるように、建武二年（一三三五）に建立された旧薬師堂（江戸時代初め頃の「国分寺村古絵図」によると僧堂の金堂跡付近にあった）に使用されていたものを再利用したと伝えられていますが、杉材の柱などに残る組立て用の穴の彫り方からこのことがうかがえます。

この門の左右には、阿（口を開いている）・吽（口を閉じている）（二体の仁王像（高さ二・五メートル）が安置されていますが、享保三年（一七二八）に造立されたもので、作者は不明です。

平成四年三月

国分寺市教育委員会



文化財委
シンボルマーク

文化財を大切にしましょう

南北朝時代の材が転用されているとのこと









中間柱の組物は平三斗、中備は撥束(ばちづか)





一風変わった大瓶束



藁座と板唐戸



藁座と板唐戸



振り返るとこの軸線の方向が武蔵国分寺(僧寺)跡になる



正面が武蔵国分寺(僧寺)跡方向



薬師堂方向を見る



国指定 史跡 武蔵国分寺跡

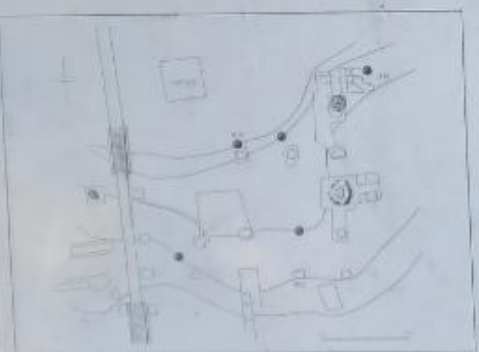
指定年月日 大正十一年十月十二日

天平十三年（七四二）の聖武天皇の命により、鎮護国家を祈願して創建された武蔵国分寺は、昭和三十一年以来の発掘調査によって東西七二〇尺、南北（中軸線上）五五〇尺の寺地と、寺地中央北寄りの僧寺寺域（二六〇×四二〇尺四方）および寺地南西隅の尼寺寺域（推定一六〇尺四方）が明らかになり、諸国国分寺中有数の規模であることが判りました。さらに、この中で寺地・寺域は数回の変遷があることが確認されています。また、僧寺では諸国国分寺中最大規模の金堂をはじめ講堂・七重塔・鐘楼・東僧坊・中門・塀・北方建物、尼寺では金堂（推定）・尼坊などが調査されています。

武蔵国の文化興隆の中心施設であった国分寺の終末は不明ですが、元弘三年（一二三三）の分倍河原の合戦で焼失したと伝えられています。史跡指定地域（全体図網点部分）約十平方尺は、現在、史跡公園の整備に向けて土地の公有化を進めています。



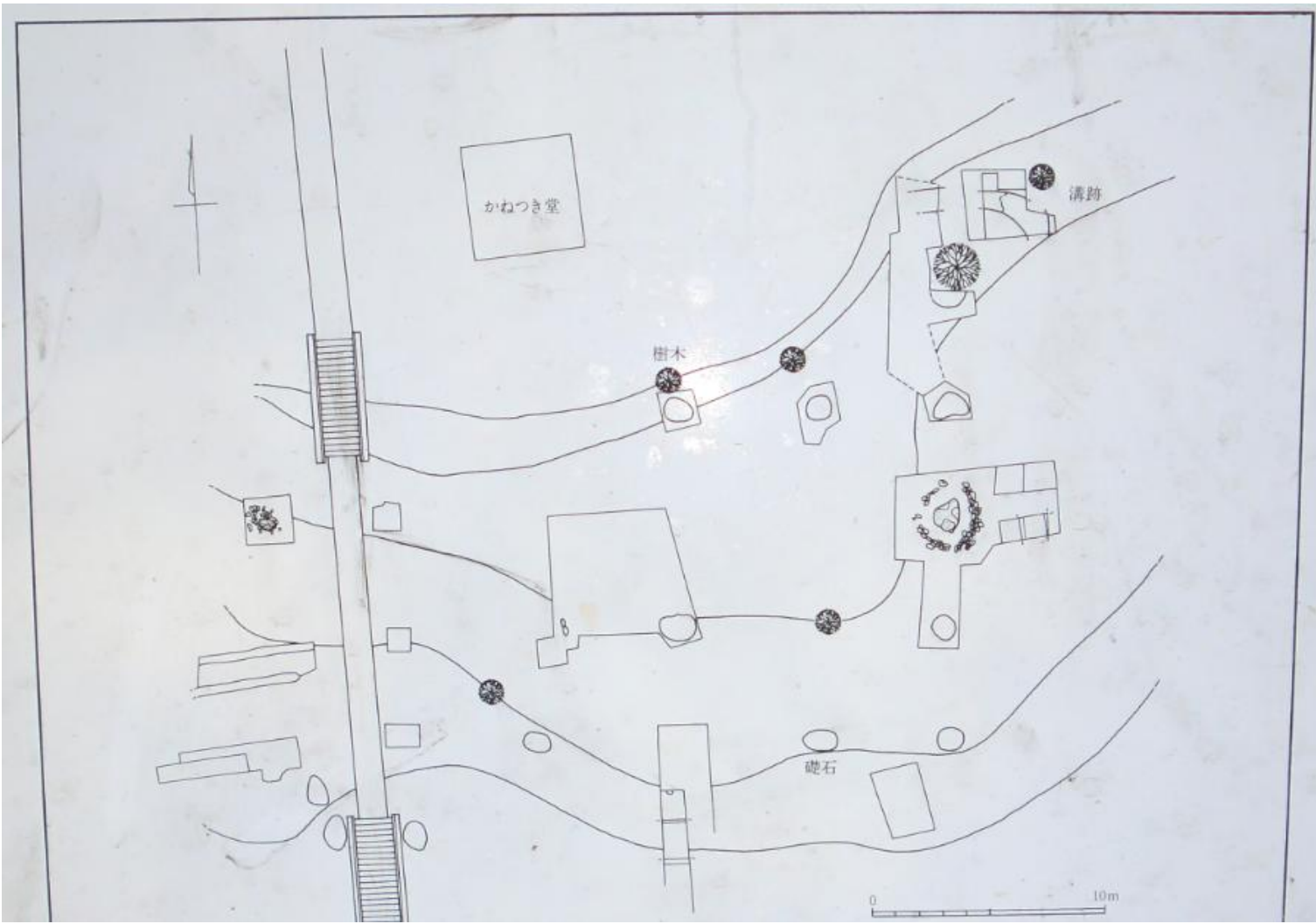
▲武蔵国分寺跡全体図
▲北方建物実測図



仁王門、薬師堂範囲が「北方建物」という括りになっている



北方建物実測図



藥師堂



右が「かねつき堂」



江戸時代再建



国指定重要文化財

木造薬師如来坐像

指定年月日 大正三年四月十七日

市指定重宝

国分寺薬師堂

指定年月日 昭和五十一年十月二十六日

薬師堂に安置されている木造薬師如来坐像は、平安時代末期あるいは鎌倉時代初期の製作と考えられ、作者は不明です。

奇木造の漆箔仕上げで、像高は約一九一・五センチメートルあります。蓮華座に坐し、印相は右手が施無畏印、左手に薬壺を持っています。台座および光背は後代の補作と思われる。

薬師如来は、日光・月光の両菩薩を侍とし、眷属として十二神将を従えています。当国分寺の二神将は、頭部の墨書から元禄二年（一六八九）の作であることがわかっています。

薬師堂は、建武二年（一二三五）に新田義貞の奇進により国分僧寺の金堂跡付近に建立されたと伝えられているもので、その後、享保元年（一七一六）に修復されましたが、宝暦年間（一七五一～一七六三）に現在地で再建されたものです。

堂内正面の長押には、明和元年（一七六四）奉献された深見玄位（ふかみ）の筆による「金光明四天王護国之寺」の寺額がかけられています。この寺額は東大寺西大門の勅額を模したものです。

平成四年三月

国分寺市教育委員会

文化財を大切にしましょう



文化財重要
シンボルマーク

側面





連子窓が付いている



樽縁(くれえん)



柱上部の粽と平三斗の組物



台輪が廻っている





中備は本蛙股



一風変わった擬宝珠



土師竪穴住居跡



土師器が出土したことから、土師器を使用した時代の意味で「土師竪穴住居跡」の名称となったとのこと

市指定史跡

土師堅穴住居跡

指定年月日 昭和三十九年一月十五日

昭和三十一年、日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会によって、初めて武蔵国分寺跡の本格的な発掘調査が行われました。

この時、僧寺の金堂・講堂跡とともに薬師堂の西側でも調査が行われ、僧寺の寺域を境する北辺・西辺の両溝跡と寺域の内外に同時代の堅穴住居跡が四棟発見されました。この中で、寺域内より発見された二号堅穴住居跡を史跡指定したものです。

この住居跡は、規模が四・〇メートル×四・二メートルのほぼ方形をしており、煮炊きを行った竈が北壁に二ヶ所の東壁に一ヶ所設けられていました。住居内部からは完形の土器八点、完形の埴一点など多数の遺物が出土しています。名称の「土師」は、当時一般的に使用されていた土器の一種類である土師器を指しており、「土師器を使用していた時代の」という意味です。

平成四年三月

国分寺市教育委員会



文化財保護
シンボルマーク

文化財を大切にしましょう



<http://homepage3.nifty.com/osuzume/musashi/index.htm>

<http://www.asahi-net.or.jp/~ab9t-vmh/touzando-m/kokubunji21.html>

<http://hya34.sakura.ne.jp/tamahoumenn/musasikokubunzi/musasikokubunzi.html>



武蔵国分寺跡資料館

<http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/shisetsu/1733/009819.html>

<http://kkubota.cool.ne.jp/musashi.htm>